口頭発表Ｃ④

徳島大学生の正課外活動における学び
―「四国キャンパス元気プロジェクト」に参加して―

吉田 博
（徳島大学大学開放実践センター）

１．はじめに

我が国では、大学のユニバーサル化が進み、学士の質保証が問題視されるようになった。このような実情を踏まえて、2008 年 12 月の中央教育審議会答申「学士課程の構築に向けて」の中で、学士課程共通の学習成果に関する参考指針として、各専攻分野を通じて培う「学士力」が提唱された[(1)]。さらに、経済産業省からは、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力として「社会人基礎力」が提唱されている[(2)]。また、岡部（2010）によると、企業が採用時の要件として重視する能力は、業界や職種に依存しない分野横断的で汎用性の高い能力であるという[(3)]。これらに共通しているのが、「チームワーク力」「自己管理力」「問題解決力」といった、集団の中で協力する力や主体的に問題に取り組む力である。このような能力の養成を、専門学部における「専門教育」のみに求めるのは少し困難な面がある[(4)]。こうした現状を踏まえて我が国の大学では、「学士力」や「社会人基礎力」を視野に入れた初年次教育や、正課外活動支援が行われるようになってきた。

２．ＳＰＯＤにおける学生の正課外活動支援

四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（ＳＰＯＤ）では、2010 年 8 月に愛媛大学で開催された「ＳＰＯＤフォーラム 2010」（以下フォーラム）の中で、学生・大学院生を対象としたプログラム「四国キャンパス元気プロジェクト」（以下プロジェクト）を実施した。これは、「正課外活動支援」をテーマに、グループワークを通して、自校における支援策の提言をまとめ、フォーラム参加教職員の前でプレゼンテーションを行うという内容である。このワークでは、他大学の学生と情報交換を行い、チームで協力して、提言をまとめるため、「学士力」に挙げられているようなソーシャルスキルが必要とされる。さらに、フォーラムに参加している教職員との意見交換や交流があり、学生にとっては、学内で活動するだけでは得られない経験ができたと考えられる。

本発表は、プロジェクトに参加した徳島大学生が、当日のワークのために行った事前準備、当日のワークの様子、プロジェクト終了後の活動について紹介することと、プロジェクトを通じて、身につけることができた、知識やスキルについて報告する。

３．徳島大学生の活動

プロジェクトには、徳島大学、香川大学、愛媛大学、松山大学から、25 名の学生が参加し、このうち徳島大学からは学部生 11 名が参加した。ワークは二部形式で実施された。第一部では、他校の学生と混成のチームを作り、それぞれの所属校で行われている支援策について紹介すると同時に、今後行わなけらばならない支援策についてブレインストーミングやＫＪ法を用いてアイデアをまとめた。その後、セミナー形式で、全国的な正課外活動支援の状況等について学び、第一部の内容について、セミナー参加教職員からフィードバックを受けた。第二部では、各大学ごとにチームを作り、セミナーで得た知識を活かして、自校で必要な支援かつ、実現可能な提案をまとめた[(5)]。その中から、優れた提案は、フォーラムの懇親会の冒頭でプレゼンテーションを行った。

このプロジェクトに参加するにあたって、徳島大学の参加学生は「ＳＰＯＤフォーラム事前準備ワークショップ」を３回実施した。事前準備では、徳島大学で行われている正課外活動及び、他大学

で行われている正課外活動の内容や目的、組織について、分担して調査を行った。今回参加した11 名は、ワークの目的に賛同して集まったメンバーで、以前からの交流がなかったため、事前準備は情報交換や交流の機会となった。

さらにプロジェクトを終えた徳島大学生は、ワークでまとめた企画を実現したいという志のもと再度集まり、11 月 11 日に「真剣徳大しゃべり場」を開催した。これは徳島大学生のキャンパスライフをテーマに、参加者同士が語り合う内容で、留学生を含む徳島大学生 22 名（うち主となる企画学生３名）と教員６名が参加した。

４.「四国キャンパス元気プロジェクト」を通じて学生が身に付けた知識・スキル

プロジェクトに参加した徳島大学生に対し、ワークの一週間後に、活動を通して身についたと思う力と、今後の学生支援活動への関わりについて、アンケート調査を実施し 100％の回収率を得た。

まず、活動を通して身についたと思う力については、「学士力」や「社会人基礎力」に挙げられている内容をもとに 12 項目を選び、それぞれ、「〇〇が身についたと思うか？」という設問に対し、４段階で回答を求めた。その結果、そう思うと答えた割合が最も大きかったのは、「主体性が身についた」という項目であった（図１）。次いで、他人に働きかける力や傾聴力が身についたと答えた割合が高くなった。また、今後の学生支援活動への関わりについては、例えば、「今回まとめた内容を、徳島大学において実際に実行してみたいと思うか？」という設問には、64％の学生がそう思うと回答している（図２）。つまり、学生は今回のワークに対し、主体的に関わり、参加することだけで満足して終わってしまうことなく、継続して活動をしていきたいというモチベーションの向上につながっていることがわかる。詳細については発表の際に示す。

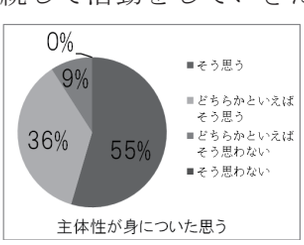

図１

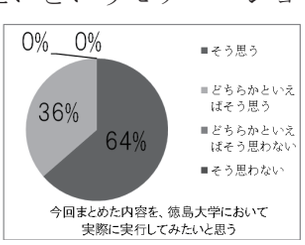

図２

５．考察

「主体性が身についた」と思う学生が多いことについて、今回のワークは他大学の学生や教職員と意見を交わし、他者の前で、自身の考えを述べたり、それぞれのグループでまとめた内容について、相互にコメントをするといった手法で進められていた。そのため、学生は自身の考えを相手に伝えたり、人前で発言するという経験を通して、自分の意見を持ち、主体的に課題に取り組む態度を身につけることができたと感じたのではないだろうか。実際、アンケートの自由記述では、「人前で話すこと、人と向き合って会話するコミュニケーションの力を身につけることができた」との回答が見られる。また、他人に働きかける力や、傾聴力といった力は、チームで活動をするうえで重要な能力である。これも、グループ作業を通して身についたと感じることができたのであろう。このように自主的な徳島大学生の活動や活動を通して身につけた知識やスキルを見ていくと、徳島大学でも、今後「学士力」を視野に入れた学生支援を行っていく必要性が高まってきているのではないかと感じられる。

６．参考文献・資料

（１）文部科学省(2008)　中央教育審議会答申「学士課程の構築に向けて」

（２）経済産業省　ホームページ
http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.htm (2010.11.30)

（３）岡部悟志（2010）企業が採用時の要件として大卒者に求める能力．大学教育学会誌，32：114-121

（４）後藤邦夫（2010）「教養教育」の再定義とカリキュラムの設計，運営，評価．大学教育学会誌，32：11-17

（５）西本佳代（2010）正課外活動支援で学生中心の大学を．SPOD フォーラム 2010 プログラム集：28